YAMAHA
Make Waves



2026年 7月19日、ROTH BART BARON SUMMER TOUR 2026　川崎公演にて実施

Sound xR 立体音響ライブ / 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

SOUND xR EXPERIENCE REPORT

会場そのものが、ひとつの楽器になる。

ステージから客席へ。左右だけでなく、高さや奥行きまで音楽の表現に。
ROTH BART BARONは「Sound xR」を用いた立体音響で、全20曲それぞれに音の配置を描き、新しいライブ体験をつくり上げました。

「ステージ上にある空気ごと拡張してくれるんです。」
西池 達也 / ROTH BART BARON（BEAR BASE 代表）

「ミックスの感覚がまったく変わりました。」
山下 大輔 / PA エンジニア（Rinky Dink Studio）



01 音が、動く。

楽曲のイメージに合わせて、
音の位置と動きをデザイン。

02 空間が、広がる。

ステージの音を、
客席を含む立体的な空間へ。

03 演奏が、届く。

音の重なりや細部まで、
演奏に込めた表情を豊かに。



ROTH BART BARON（ロットバルトバロン）は、
シンガーソングライター三船雅也を中心に活動する音楽プロジェクト。
音楽・映像・空間表現を横断する独自の表現活動で国内外から注目を集め、フェスティバルやホール公演、映画音楽など幅広い分野で活動。
豊かな空間表現と没入感のあるサウンドで、多くの観客を魅了している。



ヤマハ イマーシブソリューション
「Sound xR」

Immersive Experiences for Everyone

Sound xRを知る

INTERVIEW

ステレオの、その先へ。── ROTH BART BARONが描く、立体音響の新しいライブ体験



西池達也（左／ROTH BART BARON）× 山下大輔（右／Rinky Dink Studio）



演奏と空間をつなぐ、「Sound xR」によるサウンドデザイン

01　会場そのものを「楽器」に

― ROTH BART BARONにとって、会場の響きとは？

西池：パフォーマンスが良い時は、ホールの響きが良い、あるいは面白い場所が多かったんです。会場そのものを一つの楽器だと捉えて演奏している感覚があります。札幌の「ガラスのピラミッド」は残響が12秒以上続く空間。その響きを乗りこなせた瞬間、ここでしか生まれない音に出会えました。

― 音響側も、演奏と一緒に変化する。

山下：ライブごとにメンバーがアレンジを変えてくるんです。ミックスも決め打ちではなく、そのときの音楽の大きな流れを理解しながらつくっています。PAだけでは対応できない部分は、メンバーと話して演奏自体を工夫してもらっています。

― もともと立体的な音づくりを？

西池：三船（ROTH BART BARON・三船雅也）のサウンドメイクは立体的で多重レイヤーなんです。録音でも、声をスピーカーから部屋で鳴らし、もう一度マイクで収録するような、空間を使う体験がありました。2022年のKAAT公演では、頭上から声や残響が降ってくる感覚が本当に気持ち良くて。またやりたいと思っていました。

― 「Sound xR」との出会いは？

西池：Inter BEE 2025のデモがきっかけです。音像の精度が高く、ライブでも使ってみたいと思いました。その後、「Sound xR」が常設された川崎市アートセンターを紹介してもらい、「ここならできる」と。
山下：僕も興味はありましたが、いつの間にかやることになっていました（笑）。「Sound xR」は初めてだったので、どう取り組もうかと考えました。



02　「生」を、空間ごと拡張する

― 制作はどのように進めましたか？

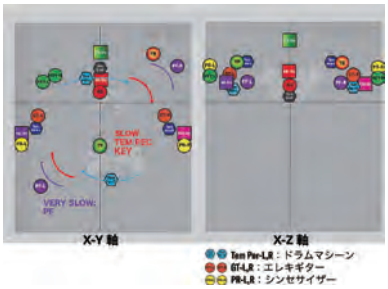
西池：デモルームで3回ほどプリプロを行いました。まず仕組みと効果を理解し、曲ごとのミキシングデータを仕込んでいきました。「音が動く」と、その音が持つ意味も変わる。会場全体の立体的な空間で、ライブ中に音を動かせることを想像するのは本当に楽しかったです。

― ステレオのミックスとの違いは？

山下：ステレオはLとRの二つのお弁当箱に、音をどう詰め込むかという作業。「Sound xR」ではお弁当箱が何十個も増える感覚で、無理に詰め込まず、それぞれの場所に音を配置できます。ただし、後ろから音を鳴らすにも理由や必然性が必要です。
西池：同じ帯域でいろんな音を鳴らせる面白さが生まれます。それに、ステージ上の音空間を客席まで拡張できる。近くのマイクで拾った音を並べるだけでなく、ステージ上にある空気ごと拡張してくれる。「生」を拡張する感覚は、泣きそうになるくらい良いものでした。

― 全20曲に個別の音像設定を。

西池：最初は6パターンほどのテンプレートを考えました。でも、曲と向き合うほど「こうあるべき」が見える。なぜ声が天から降り、トランペットが遠くから響くのか。三船が込めた哲学やメンバーの演奏のイメージを拡張するため、結局20曲すべてを作り込みました。



「みず／うみ」の音像配置・移動を示す設定画面

山下：左右だけでなく縦や斜めに広げると、新しい聴こえ方になる。分離が良すぎて不自然な部分も、一つひとつ調整する面白さがありました。

03　音に込めた情報が、届く

― 本番の音と、客席の反応は？

山下：前日にプリプロの状態を再現できるよう調整し、客席中央からスムーズに操作できました。縦や斜めの広がりを組み合わせることで、2チャンネルではできないサウンドになったと思います。
西池：ステージへ返る音もクリアでした。お客さんが音に集中して、じっと動かない。アンケートでは「トランペットのマウスピースや唇の形まで分かるようだった」という声もありました。演奏側にも高い解像度が求められる一方、音に込めた情報をより豊かに伝えられると実感しました。

― 生音と拡声音の関係にも発見が？

山下：ドラムのオブジェクトを楽器の位置から少し上に移すと、生音と分離して空間が広がりました。同じ高さなら一体感が出る。楽器や楽曲の意図で使い分ける手法だと思います。



客席で音を確かめながら進める、会場での調整

― これから、どんなライブへ？

西池：もっと大きな会場で、より多くの人に届けたいです。音に深く集中する客席の様子は大きな手応えでした。メディアアートとも組み合わせ、作り手同士で触発し合うこともできる。お客さんの中に演者が入り、音楽、空間、映像、演者、観客が一体となる体験をつくりたいですね。
山下：イマーシブオーディオは2ミックスとは違う概念で、圧倒的な可能性があります。今後、「Sound xR」が常設した会場でライブ予定がありますので、さらにイマーシブな音響体験が提供できるように技術を高めていきたいと思います。



Sound xRの立体音響を、次はライブで。

ROTH BART BARON TOUR 26-27 "GISHIKI"

詳細・チケット

2027.1.22（金）愛知
メニコンシアター Aoi
OPEN 18:00 / START 18:45

2027.3.7（日）東京 / TOUR FINAL
MoN Takanawa: The Museum of Narratives Box1000
OPEN 17:15 / START 18:00

ヤマハサウンドシステム株式会社

www.yamaha-ss.co.jp web

2026.11